

Title	ディスカッション
Author(s)	
Citation	臨床哲学のメチエ. 1998, 1, p. 17-24
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10467
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

鷲田(司会): 今日は第一回目ですので、皆さんが 教育とか学校といった問題に対してどのようなこ とをお考えなのかとかどういうアプローチをして いらっしゃるのかということをお互いに知り合う ということ、そして問題の広がりを知るというこ とも大変大事なことで、これは今後、研究会の進 め方を考える上でもヒントになることなので、今 日はせっかく提題者の方にそれぞれの形で問題を 追い詰めてもらっているんですけども、ここでの ディスカッションは必ずしも一つの問題の内側に ギュっと突っ込んで行くという形にならなくても 良いと思います。今日はいろんな同じ問題をいろ んな角度から色々主題化して「こういう視点もあ るのか」「次はこういうことも考えないといけない な」というヒントをみんなで得られたら有り難い という風に考えています。

かなということが不明確になったという気もします。寺田さんが発表の最後で、学校はちゃんと機能しているということを強調されたのを聞いてそう思いました。

「全体として学校が…」というのか、「そういう人もいて」というのか。つまり、学校がどんなものであってもそれに乗って行けない人はいる、ということを考えると「今の学校が…」という問題なのか、そもそも何人かの人を集めてことを起こそうとしたときにはかならず出てくる問題なのか、それが気になりました。

鷲田:学校というものそのものが最初からそう いった性格を持っているものなのか、あるいは今 の学校の在り方の問題ないし機能不全というもの がこういうことを招いてると考えるのか...。



不登校は特殊な生徒の問題なのか?

竹内: 寺田さんの発表の最後の所で、寺田さんが 勤めておられた高校は全部が全部こういった問題 に満ち溢れていた学校ではなくて、学校は学校と してちゃんと機能している部分も充分にあったと いうことを強調しておられました。私は(不登校 等の問題は)学校の中の特殊な事例だという気が するのです。「そういう子もいて、でもそこにすご く深刻な問題があるみたいだから考えてみよう」 というアプローチになると思います。逆に栗田さ んは、「とても特殊な生徒」は実はこんなことを考 えていたということの報告だったと思います。

だけど、一般的に「学校」というものを考えようとする時には、栗田さんの話されたようなことにばかり関わってもいられない気もします。というのは、話を聞いてると、私がよく分かってなかったのかも知れませんが、たまたま幸運にも自分にとって良い居場所が見つかったり、何かがたまたま楽しく感じられたりしたら問題は何も起こらなかったのかなあと考えてしまったからです。 (栗田さんの発表で扱われた問題は)そういった意味でいまいち私の問題にはならないなとか、どういう所を足掛かりにして何を考えて行けばいいの 寺田:(発表の)最後に、学校はちゃんと機能しているという話をしたのは、私が問題だと感じていることを非常に大きくして話をしたので、これが諸悪の根源で不登校の原因になっているというようにとられる事を恐れてのことです。私は不登校の原因が例えば受験神話だとか、知の空洞化だとかいう話をしたのではなくて、不登校という現象を考えるときに、あるいは学校を休みがちになった生徒に「学校に来なさい」「学校に来た方がいいよ」と言うときに、常に気になっていた一つの問題を報告をしたのです。

学校はちゃんと機能していて生徒は多くのことを学んで卒業して行くし、いきいきと活動している生徒もいると言いましたけど、では不登校の生徒達を前にしたときに突き付けられる問題は学校に来ている生徒と無関係ではないだろうということです。

竹内:もう一つ、よろしいですか。最初に、寺田さん・畑さん・栗田さんはそれぞれ先生・親・生徒という立場から話すという説明がありましたが、例えば寺田さんは、学校というものがあって、そして自分はそこの教員だから生徒を来させなければならないのだけれども、胸を張って「こうだか



ら学校に来なさい」と上手く言えないので悩んでいたということなのですか。(寺田同意)栗田さんは「学校というものがある」ということはあまり関係ないということですよね。(栗田同意)「今の」でなくても学校制度というようなものは無くなってくれても構わないという点が栗田さんにはありますよね。

栗田:生徒の立場としては所与のものとして学校を捕らえざるを得ないので、シンボリックな意味での 大人 が「学校とはこうあるべき」でそれをどう伝えるかとか、(この問題に関して)「子供にどう接するべきか」といような問いを、やっぱり 子供 の立場からは出せないということを(報告の際の)立場として持ったつもりです。

竹内:とても私には明瞭になりました。

寺田:補足しますが、学校という場には、いろいる問題もあるし、私が報告したような問題でなくても、もっと小さい部分でもさらに問題は沢山あると思います。例えば、校則とか制服とかあって非常に息苦しいですよね。そういった、学校がほとんど変化していないために生まれる社会とのずれから不登校などの現象が起こっているのかなという漠然とした考えがあります。

不登校の生徒達が苦しみを感じていることはあるだろうし、それはそれで考えなければならないことだと思うのですが、いま学校という場に上手く適応できていて、そこでいろいろな経験をして、いろいろな意味で成長する生徒もいるということは認識しておかなければならないと思います。

ちょっと話が飛びますが、例えば私の勤めていた学校には合唱コンクールというのがあります。 男子校で男ばかりで歌うなんて面白くなさそうですが、驚くほどレベルの高い合唱をするんですね。 率先する生徒がいる場合には、全部自分たちで仕切って合唱を作っていって、本格的な合唱組曲なんかをちゃんとやるんです。そうやってゆく中で、例えばリーダーになる生徒はリーダーとしていろいろなことを学ぶわけですよね。そして、それについてゆく生徒たちは自分の役割を果たして協力してゆくということを学ぶし、それに合唱は一人ではできませんから、合唱をやるという中で「みんなじゃないとできないこと」をやる喜びを味わうと思うんです。すごくいい経験だと思います。

でも、一方では合唱にあまり興味がなかったり、合唱のようなみんなで一斉に何かをするということに嫌悪感を持ってる子もいるし、そういう子が多いクラスでは「自主活動への強制」みたいなことになって、これはあまり良くない教育の形態なのではないだろうかと反省することもあるんですね。ですから、伝統とかそういったものによってちゃんと場ができているときには、いつも二重の、つまり一方ではそういった場を利用して良い経験をさせてやりたいと思いながら、でももう一つ下のレベルでは心苦しさを感じるということがよくあります。

鷲田:さっき竹内君がしてくれた質問というのは、 ちょっと言葉を変えて改めて寺田さんに提出する とこういうことになると思います。つまり、「学校 に行かない」という事態が、今かつてなかったよ うな形で量的にも起こっている。かつては「学校 とは行くものである」とか「学校は休まないのが 普通である」といった考え方があったと思う。そ れが今、上手く成り立たなくなっていると考える ときに、規律に従うとか授業中には黙ってるとか 人が喋ってるときにはこちらは黙って聞くとか、 そういったいわゆる道徳的に基本的なことが、学 校とは関係なしに崩れているから学校という場で 本来あるべき形が維持できなくなっているとお考 えなのか、学校が本来やるべきことをやっていな いあるいはできなくなっているから「学校に行か ない」という事態が発生しているとお考えなのか、 どちらのお考えなんでしょうか。

寺田:話をちゃんと聞くとかいったことができていないのは、学校が本来の機能を果たしていないからではなくて、他の要素がいろいろあると思います。社会全体の動向もあるだろうし。さっきもお話したように、学校が本来の姿をしていないから、だから不登校が出てくるだとか遅刻が多いだとか、そういうことではないと思います。

(司会、本間に交代)

「不登校」の位置づけをめぐって

西村:学校で行なわれる教育をあえて学校教育と呼ぶとすれば、学校教育を語る際に不登校というのは一体どういう位置付けで語られるのかというのが先ず大きな問題です。学校教育にとって不登校というものが果たして本質的な問題なのだろうかと単純に思うんです。不登校というのはいわゆる集団の教育からあぶれ出てしまったというような...。

寺田さんにお伺いしたいんですけども、不登校が学校教育の本質的な部分を映しだす鏡として不登校を語っていらっしゃるのか、むしろ、ただ学校教育を語る際の切り口として不登校というものを取り上げておられるのか。提題者の方の共通の理解がおありだと思うので、学校教育のなかでの不登校の位置付けというものをどうお考えなのかということを最初にお尋ねしたいなと思います。

それと、むしろそれを肯定的に読み替えて、学 校教育が上手くいってる状態というのはどういう ことなのかを、お尋ねしたいと思いますが、それ は後に置きます。



寺田: 非常に本質的な質問だと思うんですけども、特に公教育の中での不登校の位置付けというのはあまり考えていません。不登校という、数は少ないけれども、不登校ということを前にしたときに一人の教員として考えざるをえなかったことを語ったので、不登校という現象の学校教育の中での意味とかいうことを突き詰めてこの三人の提題を考えたわけではありません。私自身は、不登校は学校教育を考える上で本質的な問題だと思いま

すが、単なる材料として取り上げることには抵抗 があります。特に、畑さんや栗田さんの場合は、 学校教育を単なる切り口とか単なるヒントとして 取り上げたのでないと思います。

栗田:学校教育の中で不登校の位置づけがどうなっているのか、というのは、位置が高いというのはどういうことなのか、低いとはどういうことなのか、大きく占めているとか、まったくないとはどういうことなのか、それは誰にとって大事な問題なのか、教える側にとってからなのか教えられる側にとってからなのか、どちらの立場からのものとして学校教育という言葉が使われているのかわからないので今の時点では答えられません。

畑:私の場合は不登校という行動を起こしている 子供の親という立場から見える学校とか学校教育 という視点で話しているので、学校教育という課 題設定をしているつもりは初めから比較的ないん です。学校教育というものの中から見ると非常に 違った見え方をするだろうということは想像がつ くんですけれど、そういう見方ではなくってむし ろ、学校教育っていうと本当は生徒と先生に限定 できるはずなのに、不登校という問題が起こると 家庭とか親とかその他の社会環境とかがすべて ひっくるめられたようなひとつの現象として捉え られる。で、そういうところに身を置いてみたと きの学校というのがどういう風に見えるかという ことです。それが逆にそういう視点からの見え方 というのが学校教育とか教育というものの中で少 し違った材料になるのではないかと思って報告し たわけです。

高井:私の子供も不登校をしましたので、私は親の立場で話された畑さんのお話が一番良くわかりました。新聞では臨床哲学って身近な生活の問題を哲学するって書いてあって、今日も身近な問題かなって思ったんですけど、私の頭のあたりで蝶が飛んでいるような抽象的な感じでお話聞いていたんです。

高校時代教会にいっていたんですね。そこの牧師さんがココア飲みに連れていってくれたりして、非常に雰囲気が家庭的でした。田舎の小さな教会だから、お婆さんがぽつっと一人来ていたりとか、大学の生徒さんが来ていたりするわけですけど、そこには自分の居場所があると思ったんです。というのは世の中の物差しがないんですね。その物差しのない空間でほっとできて、自分にはそうい

う空間があるから、あんまり好きではなかったけ ど中学にも高校にも通い続けられたかなって今に して思うんです。私の息子が中学三年で不登校し ましたのは、「学校にはぼくの居場所がない」って いうんですよ。私は不登校はそんな難しい問題と は思っていません。例えば、会社のサラリーマン の方でも行けなくなりますよね。そこには自分が 合わないように感じてね。だから、私は居場所が 問題じゃないかと思うんです。今の世の中ってみ んな物差しで計るから、そのために一生懸命頑 張って、勉強していい会社に入ろうと思う人もい るし、そういうのが嫌いだからといってやめる人 もいるし…。だから、私はあんまり難しい次元で 人を語ってほしくないなって思います。もっと人 間のあり方という根本的なもの、そのあたりで彼 らは学校には居場所がなかったから、その時点で 行かなくなってるだけのことでね。親の立場とし ては、もっと身近な問題として、不登校をしてい る子は特別な子だっていう見方じゃなくって研究 なり考えるなりしてほしいなと思いました。

栗田:居場所の問題ということでさっき竹内さん がおっしゃてた、居場所がたまたま見つかればそ れで解決する問題なのか、ということと、いま (高井さんが)おっしゃったことがパラレルな関係 にあるなあと…。誰にとっての解決なのかという 問題なんだと思うんですよね。はっきりいって、 子供の立場で語った私としては居場所がたまたま 見つかれば確かに解決です。とりあえずあるもの として与えられた教育に右往左往して、例えば、 修道院なり通信制の高校なり、さらにここの研究 室なりが居場所になって、私の人生の中ではそれ は解決していっている、解決しつつあるというこ とは確かで、そこを抜かして語るというのは私も おかしいとは思います。そういう感覚なくして、 つまり不登校の子供を見ずしてマスメディアが語 る言説がすごく苦しかったということを言いたい のはそこで、居場所がみつかればいいじゃないか という開き直った気分が私の中にあるのも事実で す。ただ、こういうディスカッションで親御さん の立場とか先生をしている立場にあるという人の 話しを聞いて、教える側として何かをしたい、と 思うのも、ああそれもあるんだなと思ったのが、 正直な感想です。私もそんなに難しい問題として、 抽象的な言葉を操って、それでわかったような気 になるというのはいやだ、と思います。ただ、... 特に寺田さんの話しを聞いて感じたことなんです けど、とまどってカウンセラーにも頼って右往左

往している先生の姿ともつながる言葉を持ちたい、そういう先生、ある意味で私のことを理解してくれなかった先生と共通の言葉を持ちたい。私にとっては居場所が見つかれば〇Kなんですけれども、そういう先生とも仲良くなりたいという気持ちで私はこのディスカッションに参加したんですけれども、これでお答えになっているでしょうか。

学校の力が強くなったのか?

西川:今日は不登校という問題で話しが進んでい ますけれども、ぼくは1960年代、高校でまだ学 生運動の残り火があった時期にちょっと学生運動 に関わりを持ってまして、通常の高校生としての あり方をせずに、学校と親から「学校やめなさい」 と言われたわけですね。で、一度高校を退学して、 もう一度高校に行きなおしたわけですけど、二度 目の行き方はかなりいい加減なもので、自分の行 きたい授業にしかいかず、きっちり規定の三分の 一だけは嫌いな授業にも出ると、そういう行き方 をしたわけです。で、例えば、学生たちが大学で も高校でも学校という場に対して反抗の時代と、 今の不登校という事柄とは何らかの形でつながり があるんじゃないかと思うんです。ぼくが今の時 代であればきっと不登校になってるであろう、と。 あの当時はひとつの社会的な問題としてとらえら れていたものが今はきわめて個人的なところで論 議されている。それは一つには学校の力が強く なってきている、学校そのものがね。以前は、不 適応の学生に対しては停学とか退学処分という形 で対応してきたわけですが、今はそうじゃなくて 不登校の学生をどうするか、カウンセリングでも してみるか、とかね、全然ちがうでしょ。そのへ んの問題が時代の推移の中でどんな風に変わって きたのか、学校というもの、それの持っている問 題がどんな風に、本当に変質して来ているのか、 それとも何がこういう風に形を変えてきているの か、というところを少し議論できたらなあと思う んですけれども。

畑:私も同じ世代で、よくわかります。この研究会を企画した人たちといろんなディスカッションしまして、自分の高校時代のことを話したんですが、安田講堂事件や佐世保にエンタープライズが来て騒然となっていた時代でして、高校紛争というのがあって、職員室ロックアウト40日間、機動

隊が入るか入らないかの瀬戸際、高3は早く試験 を受けないと大学受験の内申書が出ません、てい うような。みんなでデモに行くとき、先生たちが 「一人も逮捕されないで帰ってくるんだぞ」と見 送ってくれたりしましてね。栗田さんが、そんな んだったら私は不登校にならなかったんじゃない か、というような話がありました。そのことと私 自身の息子の不登校のことと関連させて考えると、 今不登校を起こしている子達はまったく横につな がらない、個的なんですね。それは彼らが持たな いのと、何か持てないようにしくまれているのと 両方あるみたいで、だからこそカウンセリングの ような解決の仕方が、もっとそういう芽を摘んで しまうというような非常に個的な、生育歴とかに もっていかれるという危惧がありましたね。学生 運動のところにはっきりとした反体制の意識があ りましたが、今の子はそういう概念を持たない。 で、少年犯罪とかいうのも反体制的意識を持てな いがために起こっているんじゃないかという気が して、やっぱり個人とか家庭というものと社会と か学校というものの両方に原因があるような気が します。

西川:学校の力はすごく強くなっているね。

畑:すごく強くなっていますね。初めから分断されていて、それで自分が苦しいと感じる仕組みを人と連帯して確認しようということが全然持ててないということは、すごく大きいことです。来るなというメッセージというのもあるような気がします。何か外の社会から「来るな」といわれているという感じがあると思うんです。

西川:昔は教師対生徒だとか教師対学生という対立構造とか単純に考えられてきたのに、今はそうじゃなくて、教師も学生も、学校という所は一つの価値観で固まって、それに対して一人ころが一番でしまっているところのは、今しまっているというのはものが、制度的なものがもないか。学校というのはものだるのかなものがで個人ののおりではなっているというではないがでである。それを本当に個人の問題として、ですね。それを本当に個人の問題として、ですない。今、立ても学生なかなりませんよね。では、不でも対いら何が可能な道として残っているのか。不

登校という生き方が一人の個人の生き方として じゃなくて何らかの形でまた力を持つことがある のか。以前の学生運動がどうして挫折したのか、 ということも考えないとだめなんですよ。

本間:学校の力が強くなったということばの意味なんですけれども、一方で例えば学校は不登校児を学校の問題として何とか解決したいということでしょうか。

西川:だからですね、かつては、学校のあり方へのアンチ・テーゼみたいな事柄が学校を脅かすような攻撃的な力を持っていて、学校の側もそれに身構える必要があった。今の不登校という形で学校の内側に抱え込まれる問題となっていると思うんですね。

大久保:私は、体制・反体制という捉え方はあま りに図式的過ぎるかなという感じを受けているん ですね。学校の側はむしろいろんな要求の前に無 限後退しているという感じを非常に強く受けてい ます。だから学校はかつてに比べて、はるかに囲 い込む力を失いつつあるのではないか。自分が教 員をやっていたときに周りの同僚を見て、自分が 生徒だったころに比べて、なんて物わかりのいい 人たちなんだろうと思ってびっくりしたくらいな んです。むろんそれには自分が教員になったとい う立場の違いもあるんでしょうけれども、少なく とも彼らは自分に与えられた職分の中で、問題に 誠実に対応しようとしているという部分があると 思います。単純に、囲い込むとか見えない力が強 くなったということが言えるのかという感じを受 けます。



「連帯」して何かをするということ

寺田:切り込み方がよく分からないのですが、ヒントになるかもしれないので言うと、例えば生徒会等が何らかの要求を掲げて教員団と対峙するということはないですね。たまたま活発なメンバーに恵まれていれば、「制服なんとかしてくれ」というような運動が起こることがある。そうしたとき、比較的若い教員はシンパシーを持ちますが、年輩の先生方は、たぶん学生運動のことを思い出すのだと思うのですが、非常に敏感に早くその動きを摘もうとする。

畑:そういうことを知らない、ということもある のではないでしょうか。

栗田:連帯というのは、とてもぜいたくなものだ と思います。さきほどの合唱コンクールの話が関 連してくるのかと思いますが、つまり、共同でな すよろこび、人間が一人ではできないことを追求 できるということ、そういったことに対して、私 は「自主活動への強制」をとても感じる子ども だったんです。だから、下手に一緒にやらされる くらいなら一人でいたほうがましだと思っていま した。連帯するということに、大人はすごく喜び を感じていて、それを味わわせてあげたいと思っ て私たちにやってくれるのだけれど、それは強制 になってしまっている。私は運動会とかもあまり 好きではない子どもでした。別にかけっこが遅い というような理由ではなくて、束ねられていくの が嫌いだったんです。運動会なんて、生徒の立場 から見るとよくわかるのですが、好きな子もいる し、嫌いな子もいます。好きな子もいるというこ とは否定できない、だけど、なぜそうして共同で やらせるのだろうか、ということに答えを出す大 人がいなかった。本当に自主的に集まって、演劇 をしたり、何かを企画したりするというのは喜び なのだけど、それをすばらしいものとして大人が 語って、「今は失われている」と言われると、子ど もの立場ではとてもつらいです。ぜいたくな喜び という感じがします、連帯して動く喜びというの は。

本間:「居場所がない」というのは、例えば、連帯というような場所が見つけられない、ということなのでしょうか。

栗田:「居場所」というのは、連帯までいかない。

一対一でもいいんです。一対一でも連帯といえば 連帯かもしれないのですが。私の中では、一人で もいいからという切実な感覚から居場所という言 葉が出てきました。それがもっといっぱいできて 居場所感覚が得られて、さらにその上で連帯とい う方に行くというイメージが、私の中では強いで す。



「学校」を前提に考えることの問題

土屋:今までのお話はすごく興味深くて、いろいる考えていたのですが、不登校ということをこのように、みんなで語り合ってしまうことの問題性、つまり、不登校を通して学校を語るということではなくて、不登校自体がテーマになってしまうこと自体が不登校に苦しんでいる人をよけいに苦さと自体が不登校に苦しんでいる人をよけいにおうというのは、今日のお話で印象的だったのはじままかんなが学校というものに一枚岩の価値観を持っていることで、そこからはずれるとどこにも居場かなくなってしまう、ということで、この構造をなんとかしなければならないと思うわけです。だけど、それをなんとかしなければならないと思うわけです。だけど、それをなんとかしなければならないと言った場合に、不登校の語り方が重要になってくる。

たとえば、クラスの三分の二が不登校になってしまったら、不登校は問題ではなくなってしまう気がするのです。少なくともそんなに苦しむものではなくなる。本来、学校にはいろいろな形がありうるはずなのに、しかし我々がイメージする学校というものは、みんな同じだというころに問題があるのだと思います。今の制度では小中高といった形でできているのですが、学校というものはそもそもこうでないといけないのか、というあたりを見直していった方がいいのかもしれないという感想を持ちました。たぶん、それは、元締め

である文部省といったところに行き着くのでしょうけど、反体制とかいうこととちょっとちがった 意味で、なぜこれほどみんな同じにしてしまうの だろうというところに、私自身は目を向けたい。

それは学校というのが非常に力を持っていて、 みんなが行くから不登校が逆に問題になってしま う。それは図と地のようなもので、両方あるのに、 片方だけ、つまり、不登校の方ばかり見ていると、 どんどん苦しくなっていくだろうという気がする。 もっと簡単に言ってしまえば、不登校なんて何が 問題なの、という世界では、不登校は全然苦しく ない、問題仁ならないと思います。

徳永:その話でいえば、例えばフリースクール等 ができ初めていますが、それだって今のフリース クールのあり方は、いわば学校という制度からこ ぼれ落ちてしまった者への最小限の救済センター 程度の位置づけでしかない。初めから、子どもが 大人になっていくのに学校でなくていいじゃない か、というぐらいのことを我々は言えないのだろ うか。例えば、学校というのは、近代化の中で、 制度的にここまで成熟しすぎてしまったのかもし れないけれど、もとをたどれば、村の小さな寺子 屋とか、西洋では教会とか、そういったレベルで いくつもチャンネルがあったのが、学校制度とし て洗練されすぎてしまった。洗練されすぎてし まったから、枠が決まってしまって、その枠が見 えてしまった人にとってはつらい時代になってき た。先ほど、土屋さんがおっしゃったことで言え ば、不登校であることが問題ですらないというよ うな状況、学校はあるけれども行かないなら行か ないで大人になる方法はいくらでもある、といっ た柔らかい土壌をもっと作れないのか。学校の単 位認定といった制度自体は今のままでいいのか、 あるいは、フリースクール的なもので、そこでわ いわいやっていたら勉強の場になっているといっ た状況は作れないのか。ですから、もし不登校を 考えるのでしたら、学校という枠をどのように改 善していくかということよりも、学校の枠自体を 常識として見るのをやめてしまうことの方が、あ る意味では、解決ではないか、解決に近づく可能 性があるという気がします。

本間:学校というところを通らないででも大人になるとおっしゃいましたが、そうすると、今の「大人」は学校を通り抜けた、つまり学校のみを通して作り上げられた「大人」であるということになりますね。多元的な大人へのなり方というもの

を、学校というものが一元化しているのだと仮定 して、もしそれが変わるのならば「大人」という ものも変わることになりますよね。

徳永:変わるでしょうね。だけど、その大人の定 義ははっきりしているわけではなくて、とっさに 使った言葉です。

「学校」から離れて考えられるのか

寺田:(土屋さん、徳永さんに答える形で)学校という枠をはずすと、問題が問題にならなくなるのではないか、ということはわかるけれども、実際に不登校の子を目の前にしては、そこからはじまらないのではないのでしょうか。

徳永:不登校の子や親は、二重に苦しんでいると 思います。不登校になったことそれ自体と、不登 校になったことが今の社会ではいけないことなの だ、という罪悪感にです。その二番目の苦しみは 取り除いていけると思います。不登校は悪いこと なのだと感じなくてもいい雰囲気作りというう。 そのためには、社会の人々が「そういう気 持ちになるのも無理はない」と言えるようになる こと、それでも勉強はしたいという人のために、 フリースクールや通信制といった回路づくりを充 切だし、現実的にしていけることではないでしょ うか。

本間:そういう雰囲気作りとか、環境をととのえるということ、栗田さんのおっしゃっておられることとは、違う次元のことのような気がするのです。栗田さんは、自分のこの場所を相対化できない、ほかの場所、違った仕方で生きることができるのではないか、と問うことすらできないということをおっしゃったと思うのですが、そのあたりはどう思われますか。

栗田:(そう問うことは)いまだったら思える、いまだったら言えると思うことができるのですが・・・(徳永さんの「それだったら手の出しようがない」という発言をうけて)けれどもそういう感覚、「手の出しようがない」という感覚を持っていただきたいと思います。なんでも手を出せるのではなく、手の出せない部分もある、ということです。

馬嶋:現場の先生としては、外側から「学校には もういかなくてもいいんだ」という価値を推進し ていこうといわれたときに、では教師として現場 でどうすればいいのか、ということが見えなく なってしまうのではないか、と思うのですが。

土屋:私はむしろ、そこが落とし穴なのではないか、という気がするのです。つまり教師の側がなんにでも対応しようとするそういうありかたこそに、学校の力を強めてきたのではないかと感じるわけです。

寺田: 二枚舌のようにもとられますが、実際生徒を前にしていると、あえてそうせざるをえない、そうしたほうがよい、ということはあるように思います。もちろんそこには欺瞞が入り込む余地も十分あるとは思いますが。難しいことですが、二

重の考え方というものを保持せざるを得ない、と思います。そのかわり、生徒と向き合わないもう一つのレベルでは、批判的に考えていかなければならないと思います。

土屋:わたしがいいたかっ たのは「善意のフォロー」 がかえってあだになる、と

いうことです。わたし自身が引きこもりの学生に対して、下宿まで訪ねてみるというようなこともしたのですが、そのときに、こうして彼をフォローしてしまうことで、彼に「行かなければならない」という苦しみをさらに与えてしまう気がしたのです。これは非常に難しいことですが、不登校の子どもの親御さんたちも、みんなが総学校化してしまっていて、何とか学校に行かせてあげよう、という善意でやっていることが逆に(子どもを)からめとっているというところがあるように思われます。

どこかでそういう回路を切らない限り、もう救いようがないのではないかという気がします。

「学校」というものを根本的に問う場

迫: 僕も不登校の経験があるのですが、不登校というのは「学校に行きたいけれど行けない」ただそれだけのことではないのであって、僕の場合は

「行きたくない」ということを自分から(学校に)言ったという形です。その際に「なぜ勉強しなくてはならないのか」「なぜ学校に行かなくてはならないのか」という非常にプリミティブな疑問を問う場がない、ということを感じました。そうした問題を問いかける場がない、ということが不登校という問題ではつきつけていられるように感じます。そういうことを突き詰めて考えないと、本当に説得力のある答えが出せないと思うのです。

けれども実際にはそういうことを考えている人を認めてくれる場所がない、というのが現状です。(そういう問いを持って)親の会にいっても居場所がない、ということもありました。親の会にでていって思うことは、その場にいる人たちが不登校という問題について考え、悩みたい、と思っているように見えない、むしろ悩みから逃げたいというふうに見えるということです。



畑:そうしたことは私も 感じます。「私が嫌なんです」ということを割ということを割られる親がます。子どもの話ではなくて、自分の愚痴みたいになってしまって、が、かんにはいです」と言われるのです。結局「学校にあるのです。結局「学校に

行けない子ども」は嫌で、一日も早く「学校に行ける子ども」になって「復活」してほしい、というところからしかものをいっていない、ということは多いように思います。

けれども学校を相対化できていて、「学校にいかなくても別にいい」と思っていたはずでも、実際に自分の子どもがそうなったら、平然とはしていられなくなるのです。なにか先の見通せない不安というか、もっと根深い問題がそこにはあるように思われます。親が「学校に行かなくてもいいじゃないの」と言ってあげられたとしても、「じゃあどうする」という答えがどこにもない以上、解決にはならないように思われるのですが。

本間:本日のテーマは、不登校という事象について様々な立場から語ってみることによって、それがどんな一般的な問題をはらんでいるかを考える、ということでしたが、"同じ"不登校という事象が等質な問題設定に決して収まりきらないことがこれまでの議論を通じて明らかになったことだけでも有意義であったと思います。